OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シモンドンにおける情報（information）の概念について
Author(s)	橘, 真一
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/77579
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　橘　真一　）	
論文題名	シモンドンにおける情報（information）の概念について

論文内容の要旨

シモンドン（Gilbert Simondon, 1924-1989）の哲学的企図は未だ十全に解明されていないだろう。その理由は、シモンドンの哲学の基軸である個体化論において中心となる、情報（information）と転導（transduction）という二つの概念が、そもそも難解であるからだと推察される。無論、この二つの概念は通常の語意を大きくはみ出しており、それぞれに膨大な参照と思考を要する。

本論文では、このたった二つの概念のうち、ただ一つ情報について明らかにするためだけに労力のすべてを投入する。この情報の概念は、シモンドン哲学におけるただの中心ではなく、解釈に不可欠な基礎概念であると考えるからである。しかし、シモンドンのこの情報を見つめ続けた末にわれわれの目に見えてくるのは、個体化論における転導概念の必要性であるし、情報と転導をいわば理論的に統合するアラグマティクス（allagmatique）の要請だろう。アラグマティクスはシモンドンの造語であり、第七章で詳説するが、ここでは「変換の学」と訳し、これが個体化論を象徴するようなひとつの到達点になりうることを最後に示す。

議論は以下のように進む。

第一章では、シモンドンにおける情報の概念がいかに独特の概念であるかを詳述する。それにあたって、情報の定義にあたるものが多くあるため、それらを網羅的に抽出することを優先する。

第二章は第一章で抽出した定義をうけて、定義を成立させる条件について探っていく。とりわけ、情報には、情報が仮定している要請がいくつかある。それらを確認していく。

第三章では、情報のシステムを確認する。とりわけ、情報の体制や情報信号を中心に、前章までで確認した定義や条件がどう位置付けられるのかを見ていく。

第四章は情報概念が哲学の伝統にも根差していることを確認するため、主にベルクソンと対照を行っていく。

第五章と第六章は転導概念を扱う。情報について明らかにする論文において、ここで転導を扱う理由は、転導概念がいかに情報概念にとって不可欠の概念であるかを示し、そのことによってより情報概念を浮き立たせるためである。

第五章ではやはり多様な用例をもつ転導概念の定義を抽出するために、講義録を参照する。

第六章は個体化論の多様な用例に立ち返って転導概念の確認を進めていく。

第七章はサイバネティクスから影響を受けて造語したアラグマティクスこそが、情報と転導を統合する理論の要請である可能性を示す。

本論文では以下の方向性をもとに確認を進めて行く。

Ⅰ. 情報概念は形相概念に代わるべき概念であること

Ⅱ. 情報概念の意味内容は古義どおりかたちを与える路線を本義とすること

Ⅲ. 情報概念は想像力の議論をも引き受けていくこと

さしあたりこの三点である。煩瑣な道を通るが、この三点についてはぶれないだろう。Ⅰについてはシモンドンが言っているので、折に触れて解説していく。Ⅱについては必ずしもシモンドンは明示的に述べていないが哲学史の常識として自明ですらあるだろう。Ⅲについては論者の解釈であるので本論中で理由を示す。一文で紹介するなら、実に奇抜な物言いだが、imageがimagination（イマージュ化）するようにinformeがinformation（情報化）するのであり、その意味で情報概念はイマージュの議論をも包みこんでいくことになるという主張である。

本論文の到達点についても先に述べておく。上述の三点は到達点ではない。到達点は、ある交換である。その交換こそが個体化の中心を組織することになるだろう。その交換のただなかに情報が作用していることは言うまでもない。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　橘　真一　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　教 授 副 査　教 授 副 査　准教授	檜垣　立哉 村上　靖彦 野尻　英一

論文審査の結果の要旨

申請者橘真一氏の論考は『シモンドンにおける情報＜information＞の概念について』と題され、とりわけシモンドンの国家博士論文『形相と情報の概念に照らした個体化』（まとまったかたちでの邦訳は、申請者も共訳者にかかわっている『個体化の哲学』として刊行された）における「情報」概念を、錯綜するシモンドンの記述の中からとりだしつつまとめ上げ、情報informationがそもそも単純なコード性というよりも、in-forme=形を与えるというその原義に立ち戻って思考されるべきものであり、所謂ヨーロッパ哲学における伝統的な形相質料概念にかわり、個体化において重要な位置づけが与えられるべきという展望をもっていたことを、さまざまなシモンドンの論脈を連接させながら論じ、『個体化の哲学』の時期のシモンドンの読解に一定のめどをつけたものである。

ジルベール・シモンドンは、その刊行著作の少なさもあって、二〇世紀フランス思想史の中でも位置づけの難しい思想家であった。一般的にはジル・ドゥルーズが多くのシモンドン概念を援用し、独自の哲学を打ち立てていったこと、あるいはベルナール・スティグレールが二一世紀になってシモンドンを引きつぎつつ情報の議論を展開していることで、その名は知られているが、しかしシモンドンの思想そのものがいかなるものかについては、刊行されている文献量の少なさから必ずしも明らかになっているわけではなかった。しかしながら二一世紀になってフランスでも講義録の出版や、カイエ・シモンドン（シモンドンの研究雑誌）の刊行によって、知られざるその面が光を浴びてきた。橘氏が翻訳に関わった『個体化の哲学』の日本語訳もその関連のものである。またこの著作と双璧をなす『技術的対象の存在様態』も翻訳が進行中と聞く。

橘氏の博論は、こうしたシモンドンにかんする近年の評価の進展に応じつつも、しかし焦点をあくまでも「個体化論」における「情報」という概念に絞り込み、必ずしも明確とはいえないその全貌を浮かび上がらせようとするものである。橘氏の論文の軸は以下のことにあるとおもわれる。１）『個体化の哲学』における情報概念のさまざまな錯綜する規定を解きほぐし、それが個体化というシモンドンの思考にとってのポイントとなるあり方を、転導概念やアラグマティックス概念につながるかたちで提示したこと。２）個体化の問題を思考するときに不可欠である、転導(transduction)の概念と情報概念の差異を明確なものとし、この関係を問いつつ、前個体的なものにおいて非連続を導入する「情報」に対して、生物学的・心的・社会的個体化というさまざまな事態の連続性をつなぐ「転導」のあり方を明示したこと。３）こうした過程において、シモンドンの思考が、ガストン・バシュラールのイマージュ論と連関しつつ形成されていること、また随所にアンリ・ベルクソンの、とりわけ『創造的進化』以降の思考とのつながりを明示したこと。４）シモンドンの個体化論が、ド・ブロイ等の量子力学がもつミクロな場面と、自然というマクロな場面をつなぐ位置にあり、それを情報と転導の概念で結びつけることを明からにしたこと。５）このような試みの先に、ノーバート・ウィナーのサイバネティックスに対比させられる学としての「アラグマティクス」という学を構想したこと。６）これらを明確なこととすることにより、これまで用語レヴェルでとらえられていたシモンドン以降の、ドゥルーズやスティグレールなどといった思想家

への関連のポイントを橘氏なりに明示したこと。これらである。論考の成立においては、ベルクソンやバシュラールとの対比は、なお深い探究を必要とするとおもわれるものの、メルロ＝ポンティや当時の量子力学をも含む思想史・科学史的連関のなかでの個体化論の位置づけを、とりわけ情報概念の成立にこだわりつつ明示したことは、シモンドン研究が現在進展している状況において一石を投じるものになりえていると考える。あわせていえば、ドゥルーズやスティグレールなどとの思想との連関も、やはりなお掘り下げるべき点（特異性、エッケイタス、クロノ・トポロジー、あるいは超・個体化）があるとはいえ、そうした探究すべき点をとりだしえたことは充分評価に値するとおもわれる。

本論文の一部は、学会などで発表・投稿された論考され、学会査読論文として学会誌に掲載されたものが含まれる。また橘氏は、フランスのスリジー・ラ・サールで開催されたシモンドン・コロックに参加し、近年のシモンドンの再評価のあり方に直接触れるとともに、また何人かのシモンドン研究者にインタビューし、本稿の構想を練り上げている。さらに『個体化の哲学』（法政大学出版局）の共訳者のひとりとして、その刊行に関わっている。また今後の展開として『技術的対象の存在様態』を含めたシモンドン論の進展に歩みを進める意志を有している。

そもそも日本において、シモンドンを主たるテーマとした博士論文自身が二例目とおもわれ、現状何人かの若手研究者がさらにシモンドン研究を深めているなかで、本博士論文は、その一番基本的な論点となる個体化論の形成について、情報概念の方向から見通しをつけたという意味で、広く思想史研究にも貢献しえたと考える。

よって本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認める。